緋色の波涛

ELYSION

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色の波涛

【Ｎコード】

Ｎ７３６２Ｙ

【作者名】

ＥＬＹＳＩＯＮ

【あらすじ】

艦魂が存在する世界における史実とは異なる太平洋戦争。この作品においての艦魂は、私ＥＬＹＳＩＯＮの独自の考証によるものです。既存の艦魂作品ならびに作者様を冒涜しかねない事を前もってお詫びしておきます。

プロローグ

アメリカにとって最大の誤算は、欧州列強四ヶ国が、異を唱え、揃って日本側に付いた事だ。
異を唱えたのは、アメリカ国務長官コーデル・ハルが起草した『日米協定基礎概要案』
一般に「ハル・ノート」と呼ばれるものだ。
それが公表されるやいなや、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアの列強四ヶ国が、日本に同情した。
内容は日本に対し、たしかに狡猾的かつ屈辱的に綴られている。
それは至極当然だ。日本がこの内容に憤慨し、牙を剥く一即ち戦いを起す様に仕向けたものだからだ。
「だからといって、何故日本に味方する！」
時の第３２代大統領フランクリン・デラノ・ルーズベルトは自問する。
原因はいろいろと考えられる。
１９世紀後半から帝国主義を掲げる欧州列強は、こぞって中国（当時は清朝）に侵行するが、
それに乗遅れたアメリカは、日露戦争に勝ち、ロシアを満州から追い出した日本に対し、共同運営を
持ち掛けるが、日本はイギリスをパートナーとした。
そして１０年後に勃発した第一次世界大戦（当時は欧州大戦）。ここでもアメリカは乗遅れる。
物質的援助のみに終始し、軍事的派兵を行う機会を得られないまま、戦争は終結してしまったのである。
これは日本が、日露戦争の恩返しとばかりに、イギリスを中心とする連合国側に早々から参戦を表明し、
事実、虎の子の巡洋戦艦部隊の内、『金剛』『比叡』他を遥か離れた欧州へ派遣するという

意気込みを見せたのとは対象的だった。
加えて、戦時特需で多大な利益を得た事も、「手を汚さず私腹を肥やす」という悪しきイメージを
戦火に呑まれ、疲弊した欧州各国に植え付ける事となった。
そして大戦後、アメリカを揶揄する場合の筆頭語として「日本でさえも」が多用される事となる。
これはアメリカにとって酷い屈辱である。
よりによって、極東の小国、しかも有色人種の国と比較対象されるのだから。
それはやがて、日本に対する憎悪となって蓄積される事となる。
悪しきイメージと引換えに得た利益も、１９２９年から始まった恐慌で手痛いしっぺ返しを食らう。
以後、アメリカ経済は不況が蔓延する。
公共投資による内需拡大では効果を出せず、残された手っ取り早い方法は、戦争による需要拡大となる。
しかし、戦争をするには相手が必要だ。何処の国を相手にすれば良いだろうか？
それには恰好の生贄（スケープゴート）とする国があるではないか。そう、長年の恨みが溜まった日本だ。
けれども、他からはどう思われようと、ともかく正義を自負する彼らは、発端は日本からと考えた。
その為には日本を憤慨させる材料が必要だ。そしてこの材料がハル・ノートという訳だ。
これに欧州各国が異を唱えたのは想定外だったが、だからといって中止に至る根本的要因では無い。
日本との争いを傍観するだけなら、それで結構。
最悪、同調して攻められる事になろうとも、厄介とはなるが、まとめて叩くだけだ。
その場合でも、まずは日本という優先順位は変わらない。
何しろ日本は、優れた白人国家群に割って入ろうとする、図々しく

厚顔な唯一の有色人種国だからだ。
この忌々しい国を蹂躙し、勢いのまま、その先の中国をも我らのものとするのだ。
それに我々には頼もしい味方がいる。それは日本の背後に位置するソ連だ。
日本によってアジアへの進出を阻まれ、大戦では革命の勃発で途中脱退を余儀なくされ、
欧州各国から疎外視されているこの国は、我が国と境遇が似ている。
日本を敵とみなしている事も。
「我がアメリカは偉大だ。大丈夫。きっと巧くいく」
ルーズベルトは己にそう結論着けた。
そして、完膚無きまでに叩きのめされる日本の姿を想い、ほくそ笑むのだった。

プロローグ（後書き）

この作品は、現在の私のメインである『時空の波涛』用のプロットを生かしつつ書くものです。
というのも、日露戦争前から展開される同作品では、太平洋戦争に行き着くまでに、
自分でも途方に暮れる程の文章量がこの先必要であり、今後の予想も全くつかない事から、
忘れないうちにメモ代わりとして、一番書きたい太平洋戦争部分を先に書き殴っちゃえ！と、
相成った訳です。　要はアメリカ相手にドンパチやりたいだけなのですがｗ
とはいえ、そのまま書いたのではネタバレにもなりかねませんので、わざと変えた部分も出てくるでしょうし、第一、『時空の波涛』自体が紆余屈折した挙句、
大幅に形を変えたものになる可能性も大いに有ります。
この辺りはその時になってみないと、私自身でも解りません。
同時に、同作品・第６．５話ｂの後書きでも書いた通り、既存の艦魂作品に対して、
自分なりに感じた問題点と、その解釈についても、前面に出して書いていこうと思います。
その結果、冒涜に走るに至る事を、前もってお詫びしておきます。
艦魂が前面に出る分、未来からの技術云々（うんぬん）の件（くだり）は影を潜めます。
あくまでもこの作品における日本は、自力で史実より充実しているという設定です。
しかしながら、それでも物量チートのアメリカを相手にするには全然足りない。
その為、プロローグにある通り、欧州列強を日本の味方に付けました。

これで後方の憂いが無くなった日本は、アメリカと正面切って戦えます。

御都合主義が多々あるでしょうが、楽しんでいただければ幸いです。

第1話　艦魂たちと二人の亜子

１９４１年１２月２４日　布哇(ハワイ)近海・現地時間３：００ＡＭ

第一航空戦隊旗艦・空母『天城(あまぎ)』艦内の士官会議室は、異様な雰囲気に包まれていた。

その部屋には、十数人が詰めていたが、その全員が女性であった。

しかも軍装に身を固めた士官姿の二人を除いて、残りの女性は身体の全てを露わにした全裸なのである。

これは日本、しかも１９４０年代の更には軍艦内となれば、断じてありえない状況といえた。

しかし、この世界ではありえる事なのだ。ある特殊な存在がある、この世界においては・・・

「みんな、未明から集まってもらって御苦労様。

では、早速本題に入りましょう。攻撃隊の発艦は6時と決まりました」

軍装の二人のうちの一人、年長と見える方が事務的に告げる。

「6時だって？　最初の予定より2時間も遅ぇじゃねぇか！

そんなこっちゃ、ハワイに到達する頃にはよ、お目覚めとなった連中が迎撃準備をして待ってやがるぜ」

「そうだよ！　そんな中、突っ込んでいったら損害が大きくなっちゃうよ！」

身長差のある裸の二人が早速、相次いで反対意見を述べながら、予定を告げた彼女に食って掛かる。

それを制止するのもやはり裸な一人なのだが、その顔立ちは、先にべらんめえ口調で文句を言った女性とよく似ていた。

「赤城(あかぎ)も飛龍(ひりゅう)も言いたい事は解るけど、広瀬(ひろせ)少佐の言う事に従いなさい。
これは源田航空参謀が考えた末に決定された事なのよ。
黎明（夜明け前）時の発艦は、危険を伴うという理由からね」
「黎明時の発艦が危険？　はんっ！　帝国海軍は、何時からそんな腰抜けになったんでぇ！」
「そうは言うけど、赤城。もし無理して発艦しようとして、甲板上で事故を起したらどうする？
以降の発艦は不可、攻撃に参加出来る機数が減り、作戦の遂行そのものが危うくなるのよ」
「そうですね。それはまずいと思います」
「私も、お姉ちゃんの言う事に賛成！」
別の一人が賛成し、もう一人が更に同意する。この二人、双子と思えるほど容姿が似ていた。
「翔鶴(しょうかく)も瑞鶴(ずいかく)も新米(しんめぇ)だからって弱腰になるんじゃねぇよ！　蒼龍(そうりゅう)、おめぇはどうなんだい？」
赤城と呼ばれているその彼女は、黙ってやりとりを聴いていた比較的小柄な女性に振る。
「・・・天城さんや翔鶴、瑞鶴と同じ・・・」
蒼龍と呼ばれた彼女は、無表情に必要最小限にしか答えなかった。
「同じかよ・・・相変わらず無愛想だよな。おめぇは。加賀(かが)と一緒だと、いつでもお通夜状態だぜ」
赤城が愚痴ると、先の広瀬という士官が手をパンパンと打ち制止する。
「赤城、場を仕切るのはそれくらいにして。天城が言った通り、これは既に決定事項であって、
今更貴方たち艦魂が口出ししてどうなるものでも無い。従ってもらうしかないの。
防空部隊については、伏見宮(ふしみのみや)中尉、貴方から告げなさい」
「は、はいっ！

榛名(はるな)、霧島(きりしま)、利根(とね)、筑摩(ちくま)、それに阿武隈(あぶくま)ならびにその麾下の駆逐艦は、防空体制に努めて下さい。
空母は艦載機を発艦させてしまえば、全く無防備な状態となります。特に発艦時に狙われるのが一番危ないのです。それを守るのが、貴方たち防空隊の役目です。
どうか各自、宜しくお願いします！」
軍装姿のもう一人、伏見宮と呼ばれた中尉は、どうやら先の女性の副官に当るらしい。
たどたどしく事を伝える。
「そうね。ふっし～ちゃんの言う通りね。みんな、がんばろっ！」
「おい榛名、これは遊びではないのだぞ」
甘ったるい声を発して拳を突き上げ、ガッツポーズを作る女性。それを冷静に嗜(たしな)める一人。
二人の性格は正反対に思えるが、顔立ちはそっくりであった。
「あ～ん、きっちゃんたら、いつでもそうやって堅苦しいんだから。これくらい気楽に構えていた方が良いのよ」
榛名と呼ばれた彼女は、ぷいと拗ねてみせる。
「でも、利根姉(ね)ぇ、私達が出る幕って、あるのかな？」
「そうね。連中の持っている飛行機じゃ、私達の居場所が解ったところで航続距離が足りないから、
反撃に出る事は無いんじゃないかしら？
唯一懸念すべきはＢ－１７という四発の大型爆撃機だけど、これだって鈍調だから私達の対空砲火の餌食よ」
「そういう事かぁ。やっぱり私達の活躍の場は少なそうね。阿武隈はどう思う？」
話を振られた最後の一人、阿武隈と呼ばれる彼女は、こほんと一つ咳払いをして答える。
「たしかに利根殿の言う通りです。しかし、連中だって空母を持っています。
それが待ち構えていて、攻めてくるという可能性も充分考えられま

す」
「う～ん、なるほどねぇ。さすが秋月たち駆逐艦を統率するだけの事はあるね」
筑摩という彼女が感心していると、先ほどの広瀬という士官が話を続ける。
「阿武隈の言う事は全くもって正しいわ。
連中はレキシントン、サラトガ、ヨークタウン、エンタープライズ、少なくともこの四隻の空母を
太平洋に置いている。そして現在、彼女らの動向がはっきりしないの。注意するに越した事はないわ。
それでは解散！　それぞれが宿る艦（ふね）に戻って待機していて。
阿武隈は悪いけど、麾下の駆逐艦たちに今の事を伝えるのを忘れないで」
彼女が言い終わると、全裸の女性たちは揃って敬礼をし、驚くべき事に光に包まれてその場から消えた。
残ったのは、軍服に身を包んだ広瀬、伏見宮の二人の女性士官だけとなった。

古来より人が造りし船には魂が宿るとされていた。
そんな船に宿りし魂の内でも、軍船（いくさぶね）に宿りし魂は、特に「艦魂」と呼ばれている。
艦魂は人間と酷似しているどころか、総じて美しい女性の容姿をしており、
更にはそれを誇示するかの様に、一糸纏わぬ全裸姿でいる事が常であった。
船を女性名詞で呼ぶ理由（わけ）とか、精霊呼ばわりするのは、その辺りに由来するのかもしれない。
又、艦魂の美しい容姿には、宿りし艦（ふね）が建造されし国の影響が大き

く関わっているとされる。
即ち、日本で建造された艦に宿りし艦魂ならば黒髪も麗しい美女となるが、西洋で建造された艦ならば、金髪碧眼の艦魂もありえたのである。
事実、日本が日露戦争を控えイギリスから輸入した6隻の戦艦の艦魂や、巡洋戦艦『金剛』の艦魂は、その事実を裏付けるものであった。
それから、同型艦に宿る艦魂同士は自ずと似た顔立ちとなる。姉妹艦と言われる由縁でもある。
先ほど登場した艦魂では、天城と赤城、蒼龍と飛龍、翔鶴と瑞鶴、榛名と霧島、利根と筑摩がそうだ。
そんな艦魂ではあるが、残念ながら見る事が出来るのは、ほんの一握りの人間でしか無い。
それも艦魂とは同性となる女性のみなのである。
これが、艦魂が伝説で謳われながら、長い間謎の存在とされてきた理由でもあった。
何しろ船を操るのは男性の仕事であり、軍に従事するのも又、男性であったから、
艦魂が見れる数少ない機会というのは皆無だったのだ。
この事実に偶発的とはいえ気付き、体系化させる事に成功したのは、何を隠そう大日本帝国海軍である。
帝国海軍はこれを軍事機密とすると共に、艦魂との協調を模索する。
その為には仲介役となる艦魂の見える女性を、出来るだけ多く集める必要があった。
しかし、軍事機密な上、女性という条件のみで場当たり的に一般から探し出す訳にもいかない。
仕方無く、軍人の子女の中から密かに艦魂と面接させる等して、選び出す以外に方法は無かったのだ。
こうして発掘された艦魂が見える女性は、想像以上に少なかった。
一個戦隊に一人充足出来る程度にしか居なかったのである。

帝国海軍ではこの貴重な人材を、表向きは軍の広報担当士官として採用し、仲介役に充てたのだ。
欧米列強に先駆けて、最初の女性海軍士官が誕生した訳であるが、その実情は厳しいものがあった。
軍と艦魂との仲介役として艦の運用、作戦行動を男性参謀並みに熟知しておかねばならず、
いざ戦闘が起これば、軍人であるからには死をも覚悟しなければならない。
又、改善されたとはいえ、女性を乗艦させるのを嫌う風潮も未だ残っている。
艦魂担当の女性士官は、そんな逆境の中、日々任務遂行に励んでおり、それは先ほどの広瀬、伏見宮、
両士官とて例外ではなかった。

そんな二人には、他の女性士官とは異なる特徴があった。
それは髪の色だ。二人とも亜麻色をしていた。もちろんこの時代ゆえ染めている訳では無い。
顔立ちも日本人にしては彫が深く、二人が混血（ハーフ）だという事を暗に物語っている。
年長の広瀬亜子（ひろせあこ）少佐の父親は、日露戦争の英雄である広瀬武夫中将
（最終軍歴）
その母親はロシア貴族の娘で、彼の恋人であったアリアズナ・ウラジーミロブナ・コヴァレフスカヤ。
この世界において広瀬は日露戦争を生延び、戦後再び駐露武官となってアリアズナと再会、
結ばれた末、出来た子供が彼女という訳である。
そして、もう一人は何と皇族だ。伏見宮亜子（ふしみのみやあこ）女王（女王は直系皇族以外の子女に対する敬称）である。
父親は伏見宮博義（ふしみのみやひろよし）王。祖父に至っては帝国海軍において多大な権力を誇った博恭（ひろやす）王なのだ。

それでは母親は？というと、これがもっと凄い事となっている。
旧ロシア帝国皇帝ニコライ？世の第四皇女であったアナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァなのだ。
では何故、ロシア帝国皇女が日本の皇室に嫁ぐ事になったのか？
その経緯を簡単に記してみよう。
第一次世界大戦末期、ロシア革命が起こり、栄華を誇った皇帝一家が次々と捕えられ処刑される中、
アナスタシア皇女だけが何とか日本への亡命に成功した。
そして、日本に来た彼女は、亡き家族や祖国を憂いつつ、この地で生涯を全うする事を決心する。
しかし、婚姻をする段階になって問題が生じた。
何しろ彼女は、既に亡国とはいえ、大国ロシアの皇女である。並の貴族では釣合が取れない。
いきおい皇族からとなるが、神武天皇の時代から脈々と継がれてきた皇室の血統に、
異国人の血が混じるのは潔いものではない。
そこで直系ではない傍系から選ばれる事となり、白羽の矢が立ったのが伏見宮家であった。
この一連のアナスタシア皇女に関する時事に、先述の広瀬武夫も深く関与している。
駐露武官として妻アリアズナと共に皇女の亡命に尽力し、その後彼女が日本に来てからの婚姻にしても、
ロシア人を妻に持つ者の先例として、侍従役を拝命するに至ったのだ。
この二組の夫婦の関係は双方の娘にまで及び、いわば二人は乳姉妹の関係にあるといえた。
とはいえ、広瀬が現在２８歳に対し伏見宮は１８歳と、１０歳の開きがあり、当然軍歴も同様で、
広瀬が既にベテランの域なのに対し、伏見宮はまだ駆出しと、地位と軍での階級は逆転している。

なお、広瀬亜子と伏見宮亜子、二人に共通する「亜子」という名前は、露西亜の「亜」と、
二人の母親の名前がそれぞれ「ア」から始まる事に由来するものである。

第1話　艦魂たちと二人の亜子（後書き）

１１月２３日は戦前から続く祭日（たしか戦前は新嘗祭）なので、連日投稿です（意味不明）

遂にやってしまいました。艦魂全員すっぽんぽんｏｒｚ

ま、某掲示板で盛んに叩かれている某戦記の女性型アンドロイドと同じで、

作者である私の活力（モチベーション）の源程度にお考え下さい。

そうは言っても、既存の艦魂作家様たちは憤慨するでしょうね・・・

やっぱり。

それから、架空戦記で度々取上げられるロシア皇女の亡命を、私も今回扱ってみました。

又、日本の皇室をこの様な愚作に登場させるのも恐れ多い事なのですが、大鑑巨砲の権化として

何かと悪役扱いされる事の多い伏見宮家なのでお許し下さい。

何だか謝る事ばっかりです・・・

御意見・御感想をお待ちしています。

第2話　出撃！

１９４１年１２月２４日　空母『天城』艦上・現地時間５：４０ＡＭ

夜は明けきっていた。
大日本帝国海軍の６隻の空母『天城』『赤城』『蒼龍』『飛龍』『翔鶴』『瑞鶴』の艦上では
先ほどからエンジン音も高らかに、艦載機が次々と発艦していく。
小型の順に、零式艦上戦闘機、次いで９９式艦上爆撃機の発艦が終り、今は９７式艦上攻撃機の番だ。
これも６時には全機発艦が完了し、第一次攻撃隊は揃ってハワイへ向う予定となっている。
広瀬亜子少佐は、甲板の片隅からその様子を見守っていた。
その横では艦魂の天城が、彼女と同じく見守っている。
朝日が清々しく天城の露わな身体を照らし、いつも以上に神々しく映る。
「あの子たちのどれだけが、無事に戻って来られるでしょうか・・・」
そんな彼女が、ぽつりと呟く様に言う。
「やはり艦魂の貴方も心配になる？」
「ええ、飛行機に宿る魂ー飛魂は、下級魂とはいえ、我が子の様なもの。
それを黙って見守るしか出来ないのが、何ともやるせなくて仕方ないのです。
我が妹、赤城もあの通り口は悪いですが、飛魂を想う気持に変わりはありません。
だから先ほどあの様な発言をしたのです。それは妹に限らず、空母の艦魂であれば誰でも・・・」
天城はそう言って、左舷を航行する『赤城』の艦容を見やった。

その『赤城』艦上では、艦魂の赤城が飛魂たちを集め、破天荒な号令を掛けていた。
「いいかおめぇら！　今回の獲物は、ちったぁ骨の折れる奴らばかりだ。
しかし、我らが大親分、大日本帝国の為に人肌脱がない訳には、どうにもこうにも収まらねぇ！
そこでだ！　おめぇらは一丸となって、自慢のイチモツを、奴らの此処にぶち込んでやれ！」
赤城はそう言って、己の露わな身体を反らし、その部分一つまり股間部を強調する。
伏見宮のみならず広瀬であっても、その場に居会わせれば、赤面する事間違い無しの光景だ。
国定忠治で有名な赤城山を己の名とするからだろう、史実の野中一家を彷彿させる任侠劇じみた言動が、
彼女独特の飛魂統率法なのであった。
「よし、おめぇら、出撃だ！」
下級魂である飛魂にどれだけ理解しているのか定かではないが、「合点承知！」とばかり四散して
己が宿る機体へと向う。
赤城はそれを敬礼をして見送る。その眼にはうっすらと涙が浮かんでいる。
「無事に帰って来るんだぜ、おめぇら！」

「よお！　広瀬ちゃん、わざわざ見送りに来てくれたんか！」
再び『天城』艦上に視点を戻すと、飛行服に身を包んだ一人が広瀬に声を掛ける。
「はい、淵田隊長！」
彼女が笑顔で応える相手は、『天城』の攻撃隊総隊長を務める淵田美津雄中佐だ。

「ところで、居(お)るんか？　この艦(ふね)の女神はんは」
「ええ、艦魂の天城なら、私の右隣に」
「そっか。けど、残念やなぁ。えらいべっぴんはんの上に、すっぽんぽんやというんやないか。
それが見えへんというのはなぁ。一度でも拝んでみたいで」
「ちょっと隊長！　そんな事言うと、天城から変な目で見られますよ！」
広瀬が軽蔑の眼差(まなざ)しを送ると、
「ははは。こりゃ失敬失敬。ほな、行ってくるで。手柄を期待しとってや！」
淵田は広瀬とその隣に居るであろう天城の二人に敬礼する。
「はい。隊長も御無事で！」
二人も彼に向って答礼する。
淵田が搭乗した９７式艦攻は、エンジン音も高らかに発艦していった。
「面白い人ですね。淵田隊長は」
天城は上昇していくその機体を眼で追いながら呟く。
「そうね。でも、あれでも頼りになるのよ。何てたってこの攻撃隊の総隊長だもの」
「ええ、それは私も解ってます」
「ねえ、天城」
「何でしょうか？」
天城は突然の広瀬の問い掛けに、首を傾け訊く。
「貴方も加賀なんかと同じ様に、大砲を撃ち合う戦艦の艦魂になりたかった？」
「そうですね。戦艦となりし艦に宿ったのですから。
けれども今は違います。飛魂やみんなに囲まれて。空母となれて真に良かったと思ってます」
「そう・・・良かった」
二人は互いを見詰め微笑み合った。

同時刻、波を蹴立てて進む別の艦隊があった。やはり日本艦隊だ。
広瀬たちの艦隊が空母中心の機動部隊であるのに対し、こちらは「鉄の城」と謳われる戦艦が中心だ。
天守閣を思わせる艦橋が五つ連なっている。戦艦は5隻いるのだ。
その最も大きい天守閣である戦艦『大和』艦橋。
「そろそろ攻撃隊は発進した頃だね？」
連合艦隊司令長官・山本五十六大将は独り言の様に訊く。
「はい、予定ではそうなります」
参謀長・宇垣纏少将は、いつも通りの仏頂面で答える。
「鈴木少佐、艦魂たちの様子はどうだね？」
山本は次に一人の女性士官に訊く。
「はい、全員が身構えて待機しています」
この艦隊付けの艦魂担当士官、鈴木維夢少佐は答える。
しかし、この二人のやり取りを、知る者が見れば、どこかぎくしゃくしたものに感じるだろう。
実は、鈴木維夢は山本の娘なのである。けれども正式な娘ではない。
自他とも遊び人と目されている山本が、贔屓にしている芸者との間に設けた娘であった。
いわば私生児である。
けれども実情がそうであれ、二人はこの場でそれを曝け出すほど愚かでは無い。
あくまでもこの場においての二人の関係は、連合艦隊を率いる長官と一介の部下にすぎない。
「そうか・・・さて、どっちに転ぶかね？　いずれにせよ我々はあの島を奪取しなければならない」
山本は艦橋の窓から前方を見やった。
その先には南海の孤島・ミッドウェイがあった。

第2話　出撃！（後書き）

淵田隊長の喋り方、どうでしょうか？
私は関東生まれなので似非関西弁なんですが、地元の方からはどう思われる事やら・・・

「時空の波涛」で登場させた飛魂を、こちらでも登場させました。
設定等はほぼ同じです。
艦魂を全裸にしちゃったり、私自身「こりゃイロモノ作品になるぞ」と踏んでたのですが、
今回分終りで五十六さんの私生児を登場させちゃったりして、結構複雑な話になりそうです。
その鈴木維夢嬢の名前は「疾風怒涛！　太平洋戦争」から持って来ました。
クロスオーバーな作品となりつつありますw

御意見・御感想をお待ちしています。

資料・この世界における日本戦艦列伝（前書き）

タイトル通り、この世界での日本の歴代戦艦を簡単に説明したものです。
興味がありましたら、お読み下さい。

資料・この世界における日本戦艦列伝

・富士級戦艦『富士（ふじ）』『八島（やしま）』
・敷島級戦艦『敷島（しきしま）』『朝日（あさひ）』『初瀬（はつせ）』『三笠（みかさ）』

史実と同じくイギリスから輸入した前弩級戦艦。
しかし、機雷による損失は無く、全６隻が揃って日本海海戦に参加。
大勝利の立役者となる。
ジュネーブ軍縮条約（史実のワシントン軍縮条約）で戦艦としては引退。
『富士』『三笠』は横須賀で戦勝記念艦に、『八島』『敷島』は呉、
『朝日』は佐世保、
『初瀬』は舞鶴の各鎮守府で記念艦兼教材艦となる。
主砲：３０．５ｃｍ（Ｌ＝４０）連装２基４門　速力：１８ノット
（建造時）

・『若狭（わかさ）』（←ツェザレーヴィチ）『肥前（ひぜん）』（←レトウィザン）『クニャージ・スヴォーロフ』
いずれも日露戦争におけるロシアからの鹵獲戦艦。
この内『スヴォーロフ』は日本海海戦での損傷が激しく、現役復帰は難しいと判断された事から
外観修理に留め、『三笠』らと共に横須賀で戦勝記念艦になる。
『若狭（ツェザレーヴィチ）』はジュネーブ条約で戦艦を引退。武装撤去後、アナスタシア妃専用お召し艦となる。
『肥前（レトウィザン）』は条約後、海防艦に変更。今なお現役に留まっている。
その他にも旅順の太平洋艦隊を主とした鹵獲艦があったが、ロシアに買戻してもらっている。
賠償金が得られなかった同戦争において、この買戻し金は貴重な財源となった。

・薩摩級戦艦『薩摩』『安芸』
初の国産戦艦。史実の薩摩級が準弩級の時代遅れなものだったのに対し、３０．５ｃｍ砲４基８門を有する
純然たる弩級戦艦である。ただし、背負式配置は時期尚早とされ、第二、三砲塔は千鳥配置。
それでも両艦舷に向けられる砲門数は弩級戦艦の祖『ドレットノート』と変わらず（射界の制限はあるが）
初めて造った戦艦としては充実したものであったと言えよう。
第一次大戦後、軍縮条約を見込んでタイに売却した（タイ艦名：『トンブリ』『スリ・アユタヤ』）
なお、薩摩級と前後して輸入および建造されるはずだった香取級戦艦『香取』『鹿島』、
筑波級巡洋戦艦『筑波』『生駒』、鞍馬級巡洋戦艦『鞍馬』『伊吹』は、この世界においては存在しない。
（『生駒』『鞍馬』は艦名だけは継承）
主砲：　３０．５ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装４基８門　　速力：　２２．０ノット（建造時）

・河内級戦艦『河内』『摂津』
国産戦艦第二弾。こちらも史実が３０．５ｃｍ砲６基１２門を備えていながら、亀甲配置という陳腐さに対し、
この世界では同門数を全て中心軸線上に配したミニ扶桑級の如き艦容をしている。
両艦とも第一次世界大戦では欧州に派遣。『河内』は戦没。『摂津』は条約後、中央部の砲塔２基を
下ろし、練習戦艦となる。
主砲：　３０．５ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装６基１２門　　速力：

２３．５ノット（建造時）

・金剛級巡洋戦艦『金剛（こんごう）』『比叡（ひえい）』『榛名（はるな）』『霧島（きりしま）』
史実と同じく、進歩が著しい建艦技術の習得の為、一番艦『金剛』
はイギリスに発注され、
それを元に『比叡』以下３隻が国内で建造された。
当初、薩摩級、河内級と立続けに優良弩級戦艦を建造、急速な進歩
を遂げた日本を危険視し、
建造自体が危ぶまれたが、『三笠』以来上得意となった英ビッカー
スは、結局は強行した経緯がある。
『金剛』『比叡』は河内級２隻と共に欧州に派遣。『比叡』はジュ
ットランド海戦で戦没。
『榛名』『霧島』は後年、空母を中心とする機動部隊のエスコート
用として大改装を実施。
３５．６ｃｍ砲４基８門は変わらないものの、副砲を全廃し１２ｃ
ｍ連装高角砲８基１６門をはじめとする
対空兵器の大幅増強、塔型艦橋を新設、機関出力１５万馬力で速力
３２ノットを発揮する等、
『金剛』とは性能面で隔たりが生じている。
主砲：　３５．６ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装４基８門
速力：　３０．０ノット（金剛・開戦時）　３２．０ノット（榛名
／霧島・開戦時）

・『和泉（いずみ）』（↑エジンコート）　『鞍馬（くらま）』（↑プリンセス・ロイヤル）
欧州派遣で戦没した『河内』『比叡』の代艦として、終戦後に実施
されたイギリスのリストラ艦の中から
性能の似た両艦を安価で買入れたもの。

当初『比叡』の代艦としては準同型艦である『タイガー』を希望したが、これはまだ保有戦力であるとして
イギリスは手放さず、止むえず『ライオン』『クイーン・メリー』の姉妹艦をジュットランド海戦で
轟沈され、その脆弱性から廃艦予定となった『プリンセス・ロイヤル』とした経緯がある。
日本艦隊に編入し『鞍馬』となったが、唯一の３４．３ｃｍ砲搭載艦とあって使い勝手が悪く、
３５．６ｃｍ砲への換装を実施したが、これが大規模なものとなり、脆弱性がある中央の第三砲塔を撤去した
連装３基６門しか搭載出来ず、金剛級、特に『榛名』『霧島』とは大きく見劣りするものとなった。
現在は同じイギリスで建造された（造船所も同じビッカース）『金剛』とペアを組んでいる。
一方の『和泉』は、その後間もなく軍縮条約となった為、七つもある連装砲塔のうち、
中央部の三砲塔を下ろし、『摂津』と共に練習戦艦となった。
なお両艦とも戦没した『河内』『比叡』の代艦として、艦名も関連付いたものとなっている。
（『和泉』は『河内』『摂津』と共に大阪府を形成する旧国名。『鞍馬』は京の北東に位置する『比叡』に対し
北西に位置するという具合である）
主砲：　３０．５ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装７基１４門　　速力：２２．５ノット（和泉・建造時）
主砲：　３５．６ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装３基６門　　速力：　３０．０ノット（鞍馬・開戦時）

・『生駒（いこま）』（←デアフリンガー）　『高野（こうや）』（←ヒンデンブルグ）
ドイツからの戦利賠償艦である。スカバフローの一斉自沈が無かっ

たこの世界において、
日本は当時のドイツ最良巡洋戦艦であるデアフリンガー級２隻を得た。
（２番艦『リュッツオー』は史実通りジュットランド海戦で戦没）
金剛級とほぼ同じ大きさの為、主砲を３５．６ｃｍ砲への換装も計画されたが、『鞍馬（クイーン・メリー）』の
大規模改修に懲りて、結局３０．５ｃｍ砲のままである。
両艦共、ドイツから技術者を招いてディーゼル機関のテストヘッドとなり、現在は通商破壊用として
存在している。ドイツでもこの経験を生かし、後にドイッチュランド級装甲艦（所謂ポケット戦艦）や
シャルンホルスト級巡洋戦艦を建造する等、両国の技術向上に役立った艦である。
主砲：３０．５ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装４基８門　速力：２７．５ノット（開戦時）

・『隠岐（おき）』（↑ナッソー）　『淡路（あわじ）』（↑オルデンブルク）
こちらもドイツの戦利賠償艦であるが、史実の様に現地でスクラップにはならず、日本まで回航されて
艦隊入りを果たしている。
とはいえ、両艦とも当初より戦力になるとは考えられておらず、『隠岐（ナッソー）』は武装撤去後、
ドイツからの技術転用で無線操縦の標的艦に改造された（史実の『摂津』に該当）
『淡路（オルデンブルク）』も、生駒級（デアフリンガー）巡洋戦艦へ主砲を砲塔ごと予備として供出した後、
空母へと改造される。この改造工事で紆余曲折した経験が、後の天城級巡洋戦艦の空母化改造工事を
円滑に進める事に大いに役立つのである。

しかし、艦載機が大型化するにつれて、空母としては小型の艦体や低速にその身を持て余す様になり、
現在は練習空母や単なる飛行機運搬艦に成り果てているのが現状である。

・扶桑級戦艦『扶桑（ふそう）』『山城（やましろ）』
・伊勢級戦艦『伊勢（いせ）』『日向（ひゅうが）』

史実の扶桑級が、金剛級と連装砲塔を共通化し、６基に増やす方向に持っていたのに対し、
この世界においては横方向に拡大させ、４基という砲塔数は変わらず、代わりに三連装砲塔とし、
門数を１２門としている違いがある。
この設計方針は、河内級戦艦やイギリスのライオン級巡洋戦艦が、砲塔と機関が混在しており、
防御面の脆弱性が危惧されていたところ、はからずも両級がジュットランド海戦で被弾爆沈して
失われた事からも正しさが証明される事となった。
これは続く伊勢級でも継承され、両級は準同型艦として４隻を一緒とする場合も多く、
実際運用面でも同じ戦隊に属し、行動を共にする事が多い等、史実ほどの相違は無い。
又、史実の伊勢級に見られた劣悪な居住環境も、この砲塔配置を採用した事もあり、
この世界においては大きく改善されている。
しかしながら、全艦とも現役としている戦艦の中では最も低速の部類に入り、予備艦扱いである事には
変わりはない。
主砲：　３５．６ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装６基１２門
速力：　２５．５ノット（扶桑級・開戦時）　２６．０ノット（伊

勢級・開戦時）

・長門級戦艦『長門（ながと）』『陸奥（むつ）』
この世界においても八八艦隊計画のトップを切って建造される事となった同級は、
基本的には前級である伊勢級戦艦の３５．６ｃｍ三連装砲塔を、４０．６ｃｍ連装砲塔に改めたものである。
これはアメリカで言えば、テネシー級とコロラド級の関係と同じである。
ただし、速力の増大が求められた結果、機関部が大きくなり、全長が伸びた。
しかしながら、設計に共通する部分も多い事から着工が早く、軍縮条約時には余裕で竣工しており、
続く加賀級戦艦ならびに天城級巡洋戦艦に着手出来たのである。
４０．６ｃｍ連装４基８門というレイアウトは史実と同一であり、最も相違の少ないクラスといえる。
ただし、この長門級から塔型艦橋を採用しており、日本艦の特徴であるパコダマストは見られない。
現在は艦隊の中心を担って加賀級戦艦２隻と共に第一戦隊を形成している。
主砲：　４０．６ｃｍ砲（Ｌ＝４５）連装４基８門　　速力：　２８．０ノット（開戦時）

・加賀級戦艦『加賀（かが）』『土佐（とさ）』
史実の加賀級が、前級である長門級の４０．６ｃｍ連装４基８門を、５基１０門搭載するに合わせ、
船体を単にストレッチしただけの趣きだったのに対し、この世界においてはもっと複雑な思惑があった。

加賀級に搭載予定の主砲は、４０．６ｃｍ三連装４基１２門。
将来的には４５．６ｃｍ連装４基８門への換装も視野に入れていた。
これは、日本の八八艦隊計画に対抗するアメリカの建艦計画、通称
ダニエルズ・プランの中核を成す
サウスダコタ級戦艦と同一であり、直接のライバル同士と両国間で
認識していたのである。
更に速度面からサウスダコタ級を凌駕すべく、同級の２３ノットを
上回る必要があった。
同内容の砲を搭載する天城級においては巡洋戦艦を名乗る以上、速
力は３０ノットと具体的に決めており
加賀級に対しては戦艦として装甲の強化を図る分、速力は低下する
が、最低でも２８ノットを目標とした。
又、加賀級と天城級は設計を共通化する事で建艦速度の向上を目指
しており、この世界の加賀級が、
長門級よりも史実の天城級と紀伊級の関係に近いものであったとい
えた。
しかしながら、加賀級にしても天城級にしても、スペックを満たす
となると５万トンを越えてしまう。
軍縮条約時、未だ建造中であった加賀級に対し、アメリカはこの事
実を盾に建艦を認める代わりに
排水量を自国のサウスダコタ級と同じく、４３，０００トンに抑え
る様に強硬に言ってきたのである。
この要求を呑むには、武装はそのままで船体をサウスダコタ級並み
にコンパクトに造り直すか、
船体を生かすも武装を減らし、重量を軽減させるしかなかった。
結局、既に完成間近の船体を破棄する事も出来ず、後者を採る事と
なり、
長門級と同じく４０．６ｃｍ連装４基８門、速力２６ノットで我慢
するしかなかったのだ。
しかし、条約が失効した現在は、４５．６ｃｍ砲への換装も済み、

当初に掲げたスペック通りの状態にあり、
長門級2隻と第一戦隊を形成している。
主砲：　45．6cm砲（L＝45）連装4基8門　　速力：　28．0ノット（開戦時）

・天城級巡洋戦艦『天城（あまぎ）』『赤城（あかぎ）』
軍縮条約により空母に改造されて竣工した同級は、前述の通り加賀級戦艦と準同型艦になる予定だった。
なお『天城』が廃棄される原因となった史実の関東大震災は、この世界でも起こっているが、
大震災といえる程ではなく（震度5程度）、『天城』自身も着工が早かった事もあって進水を終えており、
被害らしい被害には遭っていない。
本級は4隻造られる事となっており、未着工で建造中止となった残り2隻の艦名も決まっていた。
三番艦は『葛城（かつらぎ）』、四番艦は『稲城（いなぎ）』となる予定だった。

・大和級戦艦『大和（やまと）』
条約明けの新世代戦艦である同級は、この世界でも建造されている。
主砲の45．6cm三連装3基9門というレイアウトは史実と同じだが、口径比は50口径であり（史実は45口径）
艦幅を狭め35m（同39m）、その分全長を伸ばし280m（同265m）、機関出力を20万馬力（同15万馬力）とする事で30ノットを確保し、列強の新世代戦艦の中では遅めだった速力を克服している。
又、被害を増大させるだけの無用の長物である15．5cm三連装副砲は当初より搭載せず、
その代わり新型の10cm長口径（L＝65）連装高角砲を20基

４０門他、史実の沖縄特攻時を軽く上回るだけの
対空兵器を充実させているところも違いがある。レーダーも当初より高性能な物を搭載している。
二番艦『武蔵（むさし）』も建造中であるが、『大和』の開戦前竣工や、空母群を優先させた為、
完成は遅れがち。その為、この『大和』が連合艦隊司令長官直率の単独旗艦となっている。
主砲：　４５．６ｃｍ砲（Ｌ＝５０）三連装３基９門　　速力：３０．０ノット（開戦時）

併せて日本戦艦にも関係の深い二項目についても記す。

・ベルサイユ条約とドイツからの賠償艦
１９１８年ドイツの降伏によって第一次世界大戦が終結すると、イギリスとの建艦競争に明け暮れた末、
大量に残存しているドイツ艦船の在り方が問題となった。
正面切って戦ったイギリスとしては全艦処分したい意向だったが、フランス、イタリアは
賠償艦として得る事を期待していた。
そこでイギリスは一計を案じる。ドイツの残存主力艦の全てをスカバフローへの回航を命じたのだ。
これは最大のライバルであるイギリス海軍の本拠地に抑留されるという屈辱を味あわせる事で、
自沈に追い込もうとしたのである。
これを艦魂同士の情報から察知した日本は、フランス、イタリアと共に阻止に乗り出す。
結果、スカバフローに回航はされたが自沈は阻止され、残存艦の行方はパリ講和会議に
委ねられる事となったのである。

自沈させる事に失敗したイギリスは次なる手を打ってきた。
バイエルン級、ケーニッヒ級、カイザー級といった主力戦艦を、自国と、直接は参戦しなかった
アメリカを巻込み、この両国で分配しようとしたのである。もちろん分配した後はスクラップだ。
これには当然、フランスとイタリアが反対したが、イギリスもドイツ艦隊ともっぱら戦ったのは
自分達だと言って譲らない。
会議は紛糾したが、結局、最強艦であるバイエルン級の2隻は、フランス、イタリアが各1隻づつ、
ケーニッヒ級とカイザー級はイギリスと（形の上だけだが）アメリカに分配された。
日本は巡洋戦艦としては最強力のデアフリンガー級2隻を得た。
その他のナッソー級とヘルゴランド級戦艦は、日本、フランス、イタリアで分け合ったが、
戦力とするには乏しいものであった。日本はこれ以外にも潜水艦Uボート10隻を得た。
こうしてパリ講和会議におけるドイツ残存艦の分配は、ベルサイユ条約の一環として締結したが、
結果、ドイツに残ったのは、旗艦を勤めたカイザー級戦艦『フリードリッヒ・デア・グロッセ』と
武勲艦である巡洋戦艦『ザイドリッツ』『フォン・デア・タン』のみであった。

・ジュネーブ軍縮条約
第一次世界大戦が終結し、イギリスに次ぐ第二位の海軍力を誇ったドイツが没落。
結果、直接の戦場とはならなかったアメリカと日本の両国が、それぞれ第二位、三位の座に踊り出て

お互いを仮想敵国と見据え、建艦競争を開始する。これは史実の通りである。
この状態にイギリスは、日米両国に軍縮会議を提案、両国も建艦競争が先の英独の顛末からも
無意味なものと解っており、これにフランス、イタリアも交えた五ヶ国による軍縮会議が、
１９２１年、中立国スイスのジュネーブで開催（史実のワシントンでないのは、アメリカが大戦不参加で
立場が弱いため）された。
内容は史実よりも緩やかなもので、戦艦の廃棄より、これ以上建造しないという趣きが強かった。
又、イギリスは今回も元ドイツ艦の完全廃棄を目論んだが、日仏伊が反発、別枠で保有が認められた。
ここで争点となったのは、日本の加賀級についてであった。結果は前述の加賀級での説明通りだが、
これにより４０（４０．６）ｃｍ砲搭載艦は、日本が長門級と加賀級各２隻の４隻、アメリカはコロラド級４隻、
サウスダコタ級２隻の６隻となった。
イギリスも両国とのバランスを取る為に４０ｃｍ砲搭載艦の保有が認められたが、大戦で疲弊した同国に
新たな建艦は難しく、新規にネルソン級戦艦を２隻、フッド級巡洋戦艦を追加で１隻建造するに留まった。
ただしネルソン級は史実の条約に縛られた窮屈なものとは違い、日本の加賀級、アメリカの
サウスダコタ級に合わせた余裕あるもので、どちらかといえば未完に終わったライオン級に近かった。

ここで保有の認められた五ヶ国の戦艦は以下の通り。
・イギリス　（戦艦１６隻　巡洋戦艦５隻）
　アイアンデューク級戦艦４隻　『アイアンデューク』『マルボロ』

『ベンボウ』『エンペラーオブインディア』
クィーンエリザベス級戦艦5隻　『クィーンエリザベス』『ウォースパイト』『バーラム』
『バリアント』『マレーヤ』
ロイヤルソブリン（R）級戦艦5隻　『ロイヤルソブリン』『ロイヤルオーク』『リベンジ』
『レゾリューション』『ラミラーズ』
ネルソン級戦艦2隻　『ネルソン』『ロドネー』
タイガー級巡洋戦艦1隻　『タイガー』
レナウン級巡洋戦艦2隻　『レナウン』『レパルス』
フッド級巡洋戦艦2隻　『フッド』『ハウ』

・アメリカ　（戦艦19隻）
ワイオミング級戦艦2隻　『ワイオミング』『アーカンソー』
ニューヨーク級戦艦2隻　『ニューヨーク』『テキサス』
ネバタ級戦艦2隻　『ネバタ』『オクラホマ』
ペンシルバニア級戦艦2隻　『ペンシルバニア』『アリゾナ』
ニューメキシコ級戦艦3隻　『ニューメキシコ』『ミシシッピ』『アイダホ』
テネシー級戦艦2隻　『テネシー』『カリフォルニア』
コロラド級戦艦4隻　『コロラド』『メリーランド』『ワシントン』『ウェストバージニア』
サウスダコタ級戦艦2隻　『サウスダコタ』『インディアナ』

・日本　（戦艦8隻　巡洋戦艦6隻）
扶桑級戦艦2隻　『扶桑』『山城』
伊勢級戦艦2隻　『伊勢』『日向』
長門級戦艦2隻　『長門』『陸奥』
加賀級戦艦2隻　『加賀』『土佐』
金剛級巡洋戦艦3隻　『金剛』『榛名』『霧島』

鞍馬級巡洋戦艦1隻　『鞍馬』
生駒級巡洋戦艦2隻　『生駒』『高野』

・フランス　（戦艦8隻）
クールベ級戦艦4隻　『クールベ』『フランス』『ジャンバール』『パリ』
ブルターニュ級戦艦3隻　『ブルターニュ』『プロバンス』『ロレーヌ』
フランドル級戦艦1隻　『フランドル』（↑独バイエルン級『バイエルン』）

・イタリア　（戦艦5隻）
コンテ・ディ・カブール級戦艦2隻『コンテ・ディ・カブール』『カイオ・ジュリオ・チェザーレ』
カイオ・デュイリオ級戦艦2隻　『カイオ・デュイリオ』『アンドレア・ドリア』
クリストファ・コロンボ級戦艦1隻　『クリストファ・コロンボ』（↑独バイエルン級『バーデン』）

その他、以下の艦が空母に改装の上、保有が認められた。
・イギリス　『グローリアス』『カレイジャス』『フューリアス』
・アメリカ　『レキシントン』『サラトガ』
・日本　『天城』『赤城』
・フランス　『ベアルン』
・イタリア　『フランチェスコ・カラッチョロ』（竣工後『アクィラ』と改名）

資料・この世界における日本戦艦列伝（後書き）

いかがでしょうか？
一部趣味に走っているとはいえ、隻数にスペック、艦名とも常識的なものではないかと自負しております。
その分、面白味に欠け、こんなもので文字数増やすな！と、起こられるかもしれませんがw
もちろん、それぞれの艦には艦魂が宿っている訳ですが、それは登場時にでも追々説明させていただきます。

御意見・御感想をお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7362y/

緋色の波涛

2011年12月2日00時53分発行